



窓に向かって両手でささげた編棒から一尺くらい垂れ下がった編みかけを、
葉子は見ていたわけではない。
窓枠に切り取られて、堅く澄んだ秋の空、
霊南坂から三河台へかけて、斜面を埋めた屋根と壁が、
西日を受けて光っていたのを、
憶えているだけである。